
黒衣のサムライ外伝

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒衣のサムライ外伝

【Nコード】

N 6 1 3 8 P

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

オムニバス形式の黒衣のサムライの外伝です。
今更になって思いついたネタや、各キャラの掘り下げなんかを、思いついたときにやろうと思います。

後付け設定なんかも多いので、基本的にセルフ二次創作だと解釈していただければ嬉しいです。

シリーズ高木の魔法「天馬流星拳」(前書き)

時期的には、ティテユスに向かう途中。
オルゴーとルクタが仲間になってすぐのことです。

シリーズ高木の魔法「天馬流星拳」

馬車での移動は暇である。

決して快適とは言えない乗り物である上に、人数が多い。最初は高木、フィア、エリシア、レイラ、ヴィスリーの五人であったが、そこにオルゴールとルクタが加わって七人である。

御者席に二人座れるので、車内は五人を収容すれば済むが、旅に必要な荷物を積み込めば、五人がなんとか寝転ぶ程度のスペースしか残っていない。

そうなれば当然、できることは限られてくる。ティテユスまでの道のりはまだ半分も過ぎては居なかった。

「魔法を考えてみた」

高木に出来る暇潰しにして、目下の課題であるのが魔法の修練である。基礎体力の向上も怠ってはいないが、こちらも進めねば帰ることができない。高木のノートには既に概念魔法と名づけた新機軸の魔法が構築されているが、まだ実験段階であり、とりあえず普通の魔法の鍛錬もやっておかねばならなかった。

「考えてみた、って。まだ風も炎もロクに使えないのに、新しい魔法？」

魔法の師匠であるフィアは呆れ口調で高木を見るが、高木が逆に呆れたような溜息をついて肩をすくめる。

「フィアはまだ僕の才能の乏しさを理解していないのか。僕の才能ではおおよそ、まともな魔法など使えない。創意工夫が重要で、今回の魔法はまさしく、創意と工夫に満ち溢れている」

高木の自信に溢れた言葉にフィアはやはり溜息で返す。才能の無さは生まれつきであり、高木自身に何の咎もないのだが、胸を張って誇りながら言うことではない。

「どんな魔法なの？」

話を前に進めようと、ルクタが高木に問いかける。漫才のように

も見える二人のやり取りも楽しいが、高木という男は未だにルクタの中で未知数であり、彼の創意工夫を凝らした魔法を見れば、彼の性質の片鱗が見えるだろうと考えてのことである。

「うむ。名づけて天馬流星拳。てんまりゆうせいけん レイラを参考に考案してみた」

半分はネタでつけた名前であつたが、如何せん、現代日本では有名な漫画も、シーガイアの人々を知る由など無い。語感がそこはかとなくかつこいいので、一同は無駄に期待をしてしまった。

ちなみに、参考になったレイラは別に聖闘士でもなければ、青銅鎧を着込んでいるわけでもない。

「レイラを参考にしたつてことは、やっぱり雷の魔法かしら？」

「わあ、なんか照れるな」

フィアの予想や、レイラのはにかみを横目に、高木は大仰に頷いてみせる。

確かに雷の魔法と言えなくも無い。魔法で作り出すのは間違いなく電流であるが、高木の才能では静電気を起こすことができるかどうかすら怪しい。

そこで高木が思いついたのは、人間の肉体が電気信号で動いているという仕組みを利用できないかということだった。

体内に微弱な電流を流せば、筋肉が反応して意志よりも素早く動くことが出来るという発想である。二、三度ほど試してみたが、上手く調節すれば思い通りの動きができそうである。

どれだけの電力が必要だとか、細やかなことは高木にもわからないのだが、実際に身体を動かすということは難なくやっているのだ。その感覚をイメージすれば、ある程度の制御は可能だと判断した。

「ふむ。では、軽くやってみようか。少し離れておいたほうが良い。理論上、これが決まればオルゴールだって吹っ飛ぶ威力になるのだからイメージするのは、一秒間に数十発の拳の雨である。間違いなく一度使えば筋肉痛になり、場合によっては肉離れもあり得るのだが、程度を間違えなければ問題ない。

マナにイメージを注ぎ込み、高木は目をカッと見開いた。

「天馬流星拳！」

必殺技は名前を叫ぶものである。魔法の発動と同時に叫んだ高木に、横で見ていたエリシアが驚いて飛び上がったが、それ以上に驚いたのはフィアであった。

丁度、高木の正面にいたのだが、突如として高木の身体がビクンと痙攣して、高木の拳が真っ直ぐとフィアに向かってきたのである。咄嗟に両手で顔を防ごうとしたが、高木の拳はフィアには届かず、空を切る。なるほど、確かに普段の高木からすれば恐ろしく素早い拳を何度も放っているではないか。

これはうまく使えばオルゴールを本当に吹き飛ばせるかもしれないと、フィアが笑顔を見せる。だが、天馬流星拳は高木としてもフィアとしても予想外の発展を見せることになる。

まず、高木の誤算としては、己の才能を少々低く見積もっていたことがあるだろう。確かに才能に乏しい高木だが、魔法の修練を重ねるうちに、少しだけ集められるマナの量が増えていた。また、電気を身体に流すイメージも何度か試すうちに、より明確になってしまっており、魔法の発動時間と規模が伸びてしまっていたのである。結果、予想以上の負荷に高木が握っていた拳を緩めてしまい、体勢も泳いだ。フィアの予想外としては、いきなり高木の体勢が前のめりに崩れて拳がぐつと近づいてきたことにあるだろう。

そして次の瞬間、高木の中途半端に開いた手がフィアの胸を驚掴みにして、ぐつと引き寄せようと揉みしだいたのである。

高木に代わって弁明すれば、腕を伸ばして戻すという一連の行動をプログラムした電気信号を常に送り続けていたので、フィアの胸を揉んだのは高木の意志ではなく、魔法の一環である。

ちなみに、掴むだけではなく、揉むという作業までこなしたのも電気による影響である。基本的に電流は収縮しか行わないので、拳は開こうとするのではなく、閉じようとする。

そこに、高木の意志で「流石に胸を掴むのは不味い」と手を開こうとするものだから、結果として閉じたり開いたり——行為として

は揉むと呼ばれるものに該当することになるのである。

「きゃあああッ！！？」

「あらら、大胆な魔法ね」

「私を参考にしたって、そういうことなの？」

ファイアの叫び声と、ルクタの呆れ声。そして、高木の意志で胸を揉まれた経験のあるレイラの悲しげな声が混じり、馬車の中は騒然となる。

当の高木はしっかりとファイアの胸の感触を吟味しつつも、割と必死で手を引き離そうと苦心しており、ファイアのビンタが飛んできて吹っ飛ばされることで、ようやく魔法も解けた。

「……ちなみに、敵を殴るために電流で身体を制御する魔法だったわけだが。少々、改良が必要だな」

「改良も何も無いわよ。問答無用で封印！」

結局、ファイアの怒号により天馬流星拳は日の目を見ることはなかった。

後にオルゴーとの決戦で高木が使用を考えたりもしたのだが、オルゴーの鎧を殴れば骨折するのは自分だと判断して使用には至らなかった。

シリーズ高木の魔法「天馬流星拳」(後書き)

基本的にフィアが被害者になることが多いですね。
そういうキャラ？

やっちゃまった裏話「御奉仕」(前書き)

えーと、どうしてこうなった？

やつちまつた裏話「御奉仕」

半ば懂れもあつて始めた旅であつたが、想像以上に厳しいものであつたりするのが現実だ。

高木はぼんやりと手綱を握りながら、隣に座るエリシアの言葉に耳を傾けていた。

「思つてた以上にヴィスリーって食いしん坊だったから、食材が少し少なくなつてきてるの。今晚から一品減らすね」

「……ふむ。まあ、ヴィスリーは力仕事をほとんど一人でこなしているからな。僕のを二品減らして良いから、ヴィスリーには今まで通りの量を食べさせてやつてくれ」

旅の食事は基本的に侘しい。急ぐ旅でない上に、金にも余裕があるので、食材は豊富に揃えているのだが、少々調子に乗りすぎた。

猪を仕留めたから余裕があるはずだと、大量に飲み食いを重ねた結果が、思っていた以上に食料を減らしていたのだ。

「マサト、二品も減らすと干し肉かスープだけになっちゃうよ？」

「むう。少々侘しいが、まあ平気だ」

食糧難という事態に陥つたことのない高木は少々樂觀的だが、毎日の食に困っていたエリシアはお腹がすくという状況の辛さをよく知っている。

「私の分を減らすよ。身体が小さいから平気だし」

「それは駄目だ。そもそも、この旅は僕が言い出したことだし、エリシアは今、成長期だろう。丈夫な身体に生まれてきたのだから、それを壊してしまうのは勿体無い。僕は食が細いので、少々減つたところで問題ない」

このような言葉の応酬では高木に軍配があがるのは、至極当然の成り行きではあるのだが、エリシアは不満顔である。エリシアにしてみれば、食糧管理を任されている手前、自分の招いた状況には自分自身でケリをつけておきたいのだが、それを言つたところで、そ

もそも旅を始めたのは自分だと高木が言っただろう。

食料は無い。少なくとも、このまま食べ続ければ二日後には食料が尽きて、丸一日を空腹で過ごす必要なくなる。一日程度で死ぬわけではないのだが、高木にしてもエリシアにしても、他人が腹を減らす状況にはしたくないという点では意見の一致を見ていた。

「仕方あるまい。無いならば得るしか方法が無い」

「だね。移動してるから罨や釣りは無理だけど、なんとか食べられるものを探してみるよ」

食べられる野草の知識や、簡単な狩猟方法は、エリシアのお家芸でもある。獵師に育てられていた時期があるので、高木は素直に任せることにした。

高木には、他にものつぴきならない事態に陥っていたからだ。

やばい、と高木は己の下半身に意識を向けた。

トールズの街を出発して四日。旅は少々の食糧難に見舞われているものの順調で、少なくともフィアやレイラ。それにヴィスリーも楽しそうに日々を送っている。

旅は恥のかき捨てとも言いが、少々開放的になっているのだろう。なにせ、狭い馬車での行動でもあるし、この四日間で高木は元の世界であれば美味しい思いを幾度も経験している。

まず、最初に遭遇したのはレイラの着替えだった。なんと初日である。

安定した気候はありがたかったが、旅に備えての厚着をしていたところで、ばかばかと暖かったものだから、汗をかいて、レイラが上着を脱いだのだが、予想以上に汗を多くかいており、休憩中で馬車に女性しかいなかったこともあって、その場で着替えていたのだが、小便から戻ってきた高木が、しっかりと着替えている最中に馬車に入ってきたのである。

レイラが背を向けていたので、高木が拝んだのは美しい背中の人

インと、身体の幅に収まりきらない巨乳の輪郭程度であつたのだが、流石にドキリとしてしまった。

そればかりではない。フィアが用を足そうと草むらにしゃがみ込んだところ、同じく用を足そうとしていた高木と鉢合わせになつて吹き飛ばされたり、風呂上りに換えの服を忘れたエリシアが裸で馬車に走っている様子など、かなり大胆な映像まで脳内に入り込んできてしまっているのである。

十七歳の少年にとって、これはキツイ。はつきり言えば生殺し。少々下品な言い方をするのであれば、一発又いてスッキリしなければ暴発のおそれがあつた。

レイラとヤつちまおうとも考えてしまったのだが、娼婦相手ならイザ知らず、元の世界に残してきた恋人を思えばおいそれと手を出すことは出来ない。かと言って、自慰で済ませるにしても基本的に朝昼晩と、隣に誰かが常に居る。

トイレと言つて茂みに隠れてというのは、少し想像してみたがあまりにも情けない姿である。

「むむむ……どうするか」

うっかり夢精でもしてしまえば、洗濯の手間が洒落にならない。可及的速やかに、しかも己のプライドを傷つけないように性欲処理をしなければならぬ。

若き男子にとって、これは食糧難以上の大問題なのである。ヴィスリーに相談しようかとも思ったのだが、その姿もやはり情けない。浮気はしたくない。だがまあ、手での奉仕を受ける程度であれば、ギリギリでセーフかと、高木はくだらないことを思案する。レイラかエリシアならば、頼めばやってくれそうではある。が、エリシアにそれをさせてしまうのは気が引ける。レイラに至っては、何せ元々色香が半端ない上に「手じゃなくて、身体全部で」とでも言い出しそうである。

ならば、フィアはどうか。性格上、やってくれそうにはないのだが、付き合いは一番長く、くだらない頼みをするのには一番適して

いる。

「……吹き飛ばされるのを覚悟で、一度尋ねてみるか」

非常に困難を極める交渉には違いない。だがしかし、そういう交渉こそが高木が最も得意とするところでもある。

口先三寸で相手を煙に撒き、いつの間にか己の意のままに操る。

自分ならばできるはずだ。今までも、これからもそう生きていくと決めたのだから。

「そういうわけで、フィア。すまないが、手でだな……」

「吹っ飛ばバカ!!」

案の定、吹き飛ばされた。高木はまず、若者男子の性欲について滔々と語り、己の置かれた状況や、今までの苦勞も語った。フィアも一応は知識があるので、高木の言わんとするところは理解を示したのだが、「手で」という単語が聞こえた瞬間に、思わずマナを集めてしまっていたのである。

「あのねえ。辛いのはわかるけど、なんで手でしないとイケないのよ!!」

「いや、だからだな。流石にその、コトに及ぶのは如何なものと思うわけで……足でももらうのは僕としては、大事なものを失いそうで」

「……そりゃ、そうだけど。でも、だから手でって発想が信じられないわよ。手よ、手。ご飯食べるのよ。日々の全部を手が支えてくれているのよ?」

フィアは大層ご立腹である。高木としても、流石に無茶な交渉であるとは思っていたが、頑張ってお願ひすれば、なんとなく折れてくれるんじゃないかと淡い期待を寄せていた。このままでは、こっちのモノを折られかねない。

ここは、軽く逆ギレでもして、フィアを沈静化させねばなるまい。

少々の暴論をぶつけて、会話の主導権を無理やり引き寄せてしまえば、あとは高木の得意分野に戻るのだから。

「じゃあ、何か。口でして貰えばよかったとも言うのか!？」

高木にしてみれば、少々声を大きくした。案の定、フィアは言葉につまり、一瞬身じろぐ。

普段は大声を出さないからこそ、イザというときの大声に周囲がしっかりと反応してくれるのである。

ここで暴論で畳み掛けてしまえば、フィアは面倒になってきて怒りをどこかに放り投げるだろう。そう思って高木が詭弁を語ろうと口を開いたときだった。

「うーん、まあ。口でなら……」

変な方向にフィアが納得していた。

え、なにこれ。どういう展開？

高木は呆然とフィアの顔を眺めながら、状況の把握に努めていた。手はアウトで、口ならセーフ。そりゃどういう理屈であろうか。

普通は手でないいいけど、口はダメ。やるのはいいけど口はダメということも多い。高木の恋人も、手は大丈夫だし、ヤっちゃったりもするのだが、口でしてくれることはなかった。

おかしい。フィアはおかしい。流石は偏屈といわれる魔法使いである。だがしかし、これは思いがけない幸運ではないのかと、高木は内心で歓喜の声を挙げた。

もうこの際、本番は浮気。それ以外はセーフという線引きを決めてしまい、異世界の旅をいろいろな意味で謳歌してしまおうかとさえ考える。

「い、良いのか……?」

「マサトも自分の手を使うのは嫌でしょ。けど、自分の口じゃ届かないし、仕方ないじゃない」

すごい理屈である。そりゃまあ、自分の口では無理なのだが。

そこで、高木はハタと気付く。

こいつはもしかして、いわゆる異世界と元の世界での文化の違いなのではないかと。つまり、こっちの世界では手が妙に神聖視されており、性関係に手を用いることが禁忌とされている。したがって口ならば良いというフィアの言葉はこの世界では道理ともなるわけである。それに加えて、性関係に割とおおらかな風習なのかもしれない。

なんとという幸運。ついぞ恋人はしてくれなかった口での奉仕である。興味が無いといえは大嘘である。この機を逃せば二度あるかはわからない。

ならばここはひとつ、郷に入っては郷に従え。文化の違いなど最初から承知していたかのように振る舞い、この勢いで奉仕してもらうしかあるまい。

「す、すまないが……宜しく頼む」

「し、仕方ないわね。まあ、こっちの世界に連れて来ちゃったのは私の責任だし……けれど、私もそういうのって初めてだから、上手に出来るかわからないからね？」

「あ、ああ……」

頬を朱に染めるフィアに、思わず高木は頷いてしまう。フィアの口は小さく、そこに自分の分身が、と考えるだけで暴発しかねない瑞々しい唇も、恥ずかしげに上目遣いで見上げる瞳も、全てが魅力的に見えてきた。

できれば、フィアの裸体も拝みたいところであるが、それは望みすぎであろうか。否、この雰囲気ならば或いは。

高木の脳内はいつになくめまぐるしく動き、この状況に最も相応しい行動をはじき出そうとしている。求めるからには、最高を。楽しむならば、最大限に。

「みんなは、丁度夕食の準備よね。丁度いいわ」

フィアはぼそりと呟いて、そっと高木の前に跪く。このまま開始するつもりなのだろう。高木としては、もう少しシチュエーション

について凝りたくもあつたのだが、遂に理性よりも本能のほうが上
を歩き始めた。

それでも、高木は最後の理性を振り絞る。こういう美味しい状況
というのは、得てして落とし穴があるものではないのかと。

そう。つまり、これはファイアの性に対する無知から来る、強烈な
オチではないのだろうか。間違つた場所を奉仕されるならば兎角、
最悪の場合は噛み切られるおそれがある。

それは不味い。非常に不味い。そしてファイアならやりかねない。
念のために考案中の概念魔法で、急所を鉄化させておくべきか。否、
ただでさえ急所であるから、鉄化の違和感による痛みを喰らえば再
起不能になりかねない。

「ファイ、ファイ……」

「大丈夫よ、任せなさい。思い切りやつてあげるわよ」

思い切りは非常に不味い。だが、既にファイアは意を決して高木の
ズボンに手を伸ばそうとしている。

命をとるか。万に一つの可能性と一時の快楽を取るのか。つまり、
生存本能と性欲による熾烈な言い争いが高木の脳内で繰り広げられ
ているわけである。普通に考えれば命を優先すべきなのだが、ファイ
アの目は少々興奮しているのか、ふにやりと緩んでおり、頬も上気
している。これを見せられては命を捨てる価値があるようにも思え
てくる。

いや、しかしこれぐらいの快感であれば、元の世界に戻り、恋人
に土下座で頼めば得られるものでもあろう。

「……ううむ」

「なによ、今更恥ずかしがるなんてナシよ。私も覚悟したんだから、
逃げようとするなら、噛み切るわよ？」

逃げ道は封鎖された。ならば、賭けるしかあるまい。

ヤバイと思えば、即座に鉄化魔法。大丈夫なら、心行くまで楽し
めば良い。

性的興奮とは違う、命の危機による動悸に高木は冷や汗をかきな

がらも、徐々に近づくとフィアの顔に、大きく頷いて見せた。

それから数ヶ月。シーガイアを後にした高木は、特に身体に欠損を抱えていることはなかった。

やつちまった裏話「御奉仕」（後書き）

オチが無いのがオチ。という試み。

まあ、普通に十七歳の男が女の子に囲まれて旅をしてたら、どうしても付き纏う問題です。

解決策として、こういう裏話があったのかもしれない。

いや、普通は無いんですけどね。御都合主義の物語なのでいいのです。

本から飛び出た黒い侍

本からみつける恋の文字とのクロスオーバー（前書き）

これは拙作「本からみつける恋の文字」及びその続編「恋から繋がる妙な縁」とのクロスオーバーです。本からくを知らなければ内容の一割も理解できないかと思いますが、あつちは黒衣ほど長くないので、暇なら併せて御一読ください。

最近、僕はモテているらしい。

恋愛に興味が無いと言いつつ、ひょんなことから恋人ができてしまつてから三年。大学に進学すると同時に同棲を始めた僕たちは、相も変わらず本ばかりを読んで暮らしている。

最初こそ慣れない生活に苦労をしたが、掃除洗濯を僕が。料理を実代がすると決めてからは家の中がうまくまわるようになった。

実代は下宿するにあたり、母親から料理のイロハを叩き込まれたらしい。それまではろくに包丁も握ったことのない実代ではあつたが、要領がいいのでめきめきと上達したらしい。実際に買い物から調理、後片付けまでを手際よく済ませる姿は様になっている。

「レシピさえあれば何でも作ってやるぞ」

古い日本家屋の台所は決して広くなく少し薄暗いが、花柄のエプロンをつけてタマネギを刻む実代は既に主婦の風格らしきものが備わっている。

一方、僕も最初は洗剤を多く入れすぎて実代のシャツを一枚バリバリにしてしまうというミスをやらかしたものの、掃除と整理整頓は得意とするところである。これは偏に実家が狭く、大量の蔵書の管理には整理整頓が必須だったからだろう。

また、実代は本屋、僕は図書館でそれぞれアルバイトをしているし、そんなにお金を使って遊ぶこともないので切り詰めて生活をする必要も無い。

生活が安定しなくては心安らかに読書を楽しむことはできない。この一年間、僕と実代は恋人というよりも夫婦に近い形で過ごしていたのかもしれない。

「鷹成君、最近なかなか良い噂が出回ってるよ」

そんな僕に妙な話を持ち込んできたのは、嘉納さんだった。

場所は僕と実代の家で、時間は夜の十時すぎ。不破と嘉納さんはよく僕たちの家に遊びに来る。

嘉納さんと言えば不破の恋人で、僕と実代が恋人になるきっかけを書いた小説家でもある。その結果、僕と実代が恋人になる経緯まで書いてしまっている。

つい最近、僕と実代の馴れ初め話とも言える「本からみつける恋の文字」が出版されて、そこそ売れているらしい。肖像権の名目で何度か食事を奢って貰っていたりもする。

嘉納さんは持ち前の明るさと人なつっこさで、大学でもすぐに友達をたくさん作っており、噂話には詳しい。彼女が僕や実代に色々な噂を持ち込んでくれるお陰で、陰に籠もりがちな僕たちも辛うじて大学生らしい雰囲気を楽しむことが出来ている。

しかし、その僕が噂になるとはこれ如何に。およそ噂や流行という類の言葉から縁遠い人間だと自負していたので、ちょっとした衝撃でもあった。

「鷹成が噂になるとはね。僕の噂はないのか？」

嘉納さんの隣に座っていた不破が尋ねると、嘉納さんはふくれっ面になってふいとそっぽを向いた。

不思議そうに小首を傾げる不破の様子を見ると、自分が本当に噂されていることは聞いていないのだろう。

去年の春、入学早々に学生自治会の会長に立候補して、圧倒的なカリスマで堂々と当選して以来、不破はちょっとした有名人になっている。その端正な容姿と落ち着いた物腰から、女性からの人気も高いという。殊、二年生に進級してからこの二ヶ月間で三人の後輩に告白されているのだから、恋人として嘉納さんも不安なのだろう。

かくいう嘉納さんも、人気があるはずだ。僕も何度か知人に嘉納さんを紹介してくれないかと頼まれたことがある。不破とセットで紹介してやったら、随分と恨みがましい目で見られた。紹介するな

らば嘉納さんと気持ちを通じ合わせている不破もまとめて紹介した方が、きっと仲良くなりやすいだろうという僕の配慮だったのだが、余計なお世話だったようだ。

ちなみに実代も嘉納さん同様に紹介を頼まれることが多い。

折角だから家に招待して、実代を紹介がてら歓待したりするのだが、どういうわけか微妙な顔をされてしまう。遠目で見ているのと実際に喋ってみるのでは印象も違うだろうから仕方ないことかもしれないが、口調が少々時代がかったているものの、僕から見ても実代は凜とした美人だし、決して他者との交流を持たないわけではない。全員が全員、微妙な面持ちで僕を見ることもないとは思うのだが。

「それで、誠二の噂というのは？」

実代が尋ねると、そっぽを向いていた嘉納さんがぱつと顔をほころばせて、僕を見た。

「この前、一緒に文芸部に顔を出したでしょ？」

「うん、そうだね」

一週間ほど前に、僕と嘉納さんは二人で大学の文芸部にお邪魔したのだ。

大学生作家、伊達倭たてしずかの正体が嘉納さんであることを一年かけて突き止めた文芸部は、自分たちが書いた小説の品評会に嘉納さんを招待した。是非、プロの目で見て欲しいとのことだった。

嘉納さんは書くのは得意で、読むのも勿論好きなのだが、あまり感想を言うのは得意ではない。それで、読書を趣味とする僕たちの誰かを連れて行くこうと思ったのだが、不破と実代は齒に衣着せぬ物言いをするので、場合によっては文芸部の面々に取り返しのかないトラウマを抱えさせてしまう。そこで、比較的大人しい僕を選んだというわけだ。

素人の書く小説がどんなものかと興味があつたので嘉納さんに同行したのだが、可哀想だったのは文芸部だろう。僕と実代、不破の三人の中で、文章表現に一番口うるさいのは僕だった。

初対面の人間がたくさんいる中で、僕はすっかり細やかな表現の違和感や、ちよつとした文章のミスを小一時間も追求してしまった。嘉納さんが途中で止めてくれなければ、僕は一日中喋っていただろう。

「……それで、やっぱり文芸部の人が怒ってた？」

僕がおそろおそろ尋ねると、嘉納さんはにこやかに首を横に振った。

「良い噂なのだろう。怒るというよりも、歓迎されているということなのだろう」

「ああ、なるほど」

実代のアドバイスに、僕はほっと胸をなで下ろした。あまり他人に関心を持たない僕でも、やはり嫌われるのは喜べることはない。どうせなら仲良くするほうが気分も楽になる。

しかし、嘉納さんは「うーん」と唸り、不破を見た。不破は何かに気付いたようで咳払いをすると、肩をすくめて僕を見た。

「歓迎されているという表現は少々語弊があるな。まあ、平たく言えば好印象を与えたのだろう」

なるほど、散々口うるさく言ってしまったが、彼らにとっては良いアドバイスだったのかもしれない。真剣に意見を求められていたと言っことなのだろう。

「……俊彦君、それだと鷹成君にはわかんないよ」

僕が一人で頷いていると、呆れたように嘉納さんが呟いた。どうやら僕の仕草から明らかに勘違いをしていることを悟ったようなのだが、さっぱり意味がわからない。文芸部で僕は取り立ててユーモラスな会話をしたわけでもなく、淡々と文章について追求していただけなのだが。

首を傾げる僕に、嘉納さんはやれやれと溜息をついて、ぼそりとかう尋ねた。

「草食男子って聞いたことある？」

僕はベジタリアンではないのだが、どうやらそういうことではないらしい。

草食男子とは恋愛に対して興味が薄く、積極的ではない男性を指す言葉のようで、最近はその草食男子をタイプに挙げる女性も多いと言った。

確かに草食男子の特徴と、僕の特徴に合致する点は多い。いや、多いというかまさしく僕のことだろう。

「鷹成君って童顔っていうか、優しそうな顔してるでしょ。先輩方がなかなかねえ、気に入っちゃったみたいなんだ」

なるほど、僕の容姿や性格が、何故か時代の波にうまく乗り合ってしまったらしい。恋愛に興味が無いことが、恋愛の第一歩とも言える好みのタイプに合致してしまうところに矛盾を感じなくもないが、それを言えば恋愛に興味がなかったはずの僕が、同じく恋愛に興味のなかった実代と交際しているのもおかしい話だ。

ちらりと実代を見ると、彼女も草食男子という言葉を知らなかったらしい。僕の顔を見て、首を捻ったり何かを思い出そうと虚空を見つめたりしていた。

「……よくわからんのだが、恋愛に興味が無い男と、どうすれば実際にまで発展させられるのだ？」

実代がそれを言ったら、自分の行動を全否定することになると思ったのだが、僕と実代の馴れ初めは特殊な部類に入るだろう。こんな恋愛があちこちに転がっていたならば、嘉納さんの新作「本からみつける恋の文字」が斬新だと評判になることもない。

「私も詳しくないし、そもそも草食男子にちっとも魅力なんて感じないから……まあ、聞いた話だと肉食女子っていうのがあるみたい」

嘉納さんは曖昧に答えたが、中々に空恐ろしいネーミングだ。男女間で弱肉強食の関係が成り立ってしまっている。要するに、女が男を食べると言うことだろうか。食ったというのは、主にセックスをしたときに使う言葉だと思っていた。

そうなるも少々おかしい。昨日の夜、僕は若い男の常として性欲を持て余してしまい、実代の部屋にお邪魔して思うさまに抱いたばかりである。草食男子の代表たる僕が率先してセックスをしているのは明らかな矛盾だ。

「昨日のことはどう思う？」

実代が直球で僕に尋ねてきた。述語をうまく隠しているので不破や嘉納さんにはその真意が伝わらないだろうが、それにしても実代も全く同じ思考をしているのが、同棲の成果だろうか。

「概要だけじゃわからないものかもしれない」

「ふむ、それもそうか」

僕たちは恋愛に興味が無いから交際を開始したという、それだけ聞けば矛盾の塊のような馴れ初めだ。そうなれば、草食男子にも何か深いわけがあつてセックスに関しては肉食化するのもかもしれない。「なんとなく、昨日のことが想像できてしまうのが友情の悲しいところだね」

不破には会話の内容から、僕と実代が昨日セックスしたことが理解できてしまったのだろう。しばらくして嘉納さんも気付いたように、少しだけ頬を赤らめた。あつけらんとした人だけど、やはり女の子だけあつてそういう話題には恥じらいを持つのだろう。

「それは兎角、鷹成が流行の草食男子という点に関してはその通りだと思う。人気が出るのも頷ける。良かったな、鷹成」

「別に良くはないよ。僕は実代としか恋愛をする気がないから」

もつと言えば、実代としか恋愛ができないのだ。探せば恋愛に興味がない女性はいえるのかもしれないが、そもそも僕も恋愛に興味がないので、探す気すら起きない。

「あはは、相変わらずだね。また部屋に連れてきてくれって言われてたんだけど、やめといたほうがいいね」

嘉納さんは早速、携帯電話を取り出して連絡を入れようとした。

しかし、ふと僕の横から手が伸びて、嘉納さんの携帯電話を掠め取った。

「え……実代？」

「ふむ、中々面白そうじゃないか。恋人がモテていれば嫉妬すると聞くが、それは私達にもあてはまることなのか興味がある。私も同行しよう」

実に楽しそうに、実代が不敵な笑みを浮かべた。

久方ぶりの「恋人らしいこと」に、思わず僕は苦笑して、不破と嘉納さんは顔を見合わせる。

「うーん、仕方ないなあ。それじゃあ、もうちょっと規模も大きくしようかな」

嘉納さんは呆れた様子ながらも、すぐに実代同様の不敵な笑みを浮かべるのだった。

嘉納さん曰く、どうせならば不破も連れて行かないとすぐに僕と実代が恋人だとバレてしまうとのことだった。

ただし、四人で文芸部のドアを叩くのは気が引ける。そこで、嘉納さんの作家仲間を一人呼び寄せて、ちよつとした座談会を開こうということだった。

これには、僕や実代。それに不破も大歓迎であった。小説は小説として楽しむスタイルの僕たちだが、作家本人にもやはり興味を持つてしまう。嘉納さんから呼び寄せる作家の名前を聞けば、僕と不破は特に盛り上がった。

鈴科王。三年ほど前にデビューした作家で、ややライトノベル寄りながら、堅い文章とキャラクター描写に定評のある作家である。不破が彼のファンで、不破から彼の本を借りて読んだ僕もファンになっていた。

かくして、鈴科王の予定が合う二週間後の金曜日に、僕たちは再び文芸部の人間と顔を合わせるようになった。

どうやら文芸部の人間は鈴科王よりも嘉納さんのファンであるら

しく、そこまで大歓迎というノリでは無かった。実際に作家としての知名度も人気も嘉納さんの方が上である。

それでも、僕と不破はこっそりサイン色紙を用意するはしゃぎっぷりであり、鈴科王を待っていた。

先に出迎えに行った嘉納さんを待ち構えながら、しきりに喋りかけてくる文芸部の諸姉に適当に相槌を打つ。不破は待つ間に文芸部が発行している冊子を読んで、作者を捕まえては感想を言っている。実代は知人がいたらしく、中々爽やかな好青年風の男と喋っていた。「お待たせー」

そうしている間に、嘉納さんが部室に戻ってきた。僕と不破がいち早く反応して、速攻で振り返ると、嘉納さんの後ろに控えている男——鈴科王と目が合った。

第一印象は、でかい。そして、細い。

おそらく190センチを超える長身痩躯で、眼鏡をかけた着流し姿の男だった。まるで大正文士のような出で立ちであり、年齢は二十代後半だろうか。落着いた風貌は兎角、渋い。

「紹介するね。私の作家友達で、あと、専属編集者でもある鈴科王先生」

専属編集者とはこれ如何に。そう思っていると、鈴科王は細長い体躯を軽く折った。それが礼だと気付くまで数秒。なんというか、圧倒的な存在感を放つ人だった。

「今日はお招き頂いて感謝するよ。妙もありがとう」

鈴科王は嘉納さんに微笑みかけて、ゆっくりと部室に入ってくる。文芸部の部長が歓迎の言葉を述べて、鈴科王に席を勧める。

文芸部の面々。特に女性達は憧れの作家というよりも、渋い男前の登場に浮き足立っていた。実代も満更ではないようで「ほう」と短く声をあげて鈴科王の顔をじつと見ている。

「鈴科先生、お会いできて光栄です」

そんな中、やはり積極的に行動するのが不破である。どちらかと言えば似た雰囲気を持つ不破に、鈴科先生は不敵な笑みを漏らして、

不破の差し出した手を握り返した。

「君は、おそらく不破君じゃないだろうか。妙から話を聞いているよ」

不破は珍しく照れ笑いを浮かべた。一体、どんな話が嘉納さんの口から漏れ伝わったのかは知らないが、憧れの作家が自分の存在を認識してただけで嬉しいのだろう。

「それじゃ、折角だから鈴科先生も交えて、品評会でもしよっか。人気じゃ私の方が上だけど、文章は先生の方がずっと凄いから、きつと良い勉強になるよ」

嘉納さんの言葉に、鈴科王は苦笑した。確かに嘉納さんの『恋』は若年層に人気で、発売から数年経った今でも書店で手に取る人が多い。鈴科王の代表作『黒衣のサムライ』も勿論売れているのだが、コアなファンがついているという塩梅で、知名度や人気では圧倒的に嘉納さんに分がある。

しかし、文章ではやはり鈴科王だろう。決して難解な語彙を使うでもなく、叙情感に溢れているわけでもないのに、素直に情景を脳裏に蘇らせる文章と、巧みなキャラクター捌き。我が子のようにキャラクターを愛していなければできないことではないと嘉納さんもベタ褒めをするぐらいなのだ。

やや緊張の面持ちの文芸部とは裏腹に、僕は心を弾ませて品評会に参加することになった。

「ふむ、言葉をよく知っており、実に多彩な表現が組み込まれている。語彙だけならばプロにも通用するだろう。ただ、少しテンポが悪いな。表現に幅を持たせるのは勿論重要だが、読みにくいのは勿体ない」

鈴科王が加わった品評会は、彼の圧倒的な弁舌に終始したと言っている。いい。

文章を書くのだから言葉をよく知っているのは当然だが、むしろ

彼の場合は言葉をよく知っているから文章を書いたのではないかと思うほどだ。とにかく、論理的な解釈から全体の構成まで、流石はプロであり、編集者でもあったというのが頷ける。

それに対して、比較的よく食らいついたのが不破と実代だろう。読書量だけならば負けないという自信がある二人は、半ば挑戦の意味も兼ねて鈴科王の言葉に反論をしたり、質問を投げかけたりしていた。既に文芸部員達は蚊帳の外であろう。如何に文章が好きで書いているといえども、僕達の読書量には及ばない。

結果、文芸部員の諸姉諸兄は鈴科王を畏敬の目で見える形となり、実代と不破もまた注目を浴びていた。

「そろそろ良い時間だね。先生はこれで帰るし、私もお暇するね。俊彦君、鷹成君に実代。行こうか」

三時間ほどの品評会に、鈴科王も流石に喉が渴いたのだろう。最後にみんなと握手をして、僕たちと一緒に文芸部を後にした。

「ちよつと喫茶店でも寄つていこうか。高木さん、時間ある？」

「うむ。小旅行を兼ねているからな」

大学の敷地内を出たところで、嘉納さんが鈴科王に声をかける。

どうやら、鈴科王とはペンネームらしく、本名は高木という名前のようなのだ。

「折角だから、みんなもどうだい。鷹成君に、雪吹さん。それに不破君。ずっと君達に会いたいと思っていたんだ」

「ぼ、僕たちにですか？」

「ああ。なんと言つても、あの『恋』は編集者としての僕にとって初仕事だったからね。妙に話を聞いて、『本からみつける恋の文字』を読んでから、是非とも会いたいと思つていたんだ」

鈴科王——否、高木さんはにこりと笑い、大学のすぐ近くにある喫茶店に入つていった。

「ふむ、行こうか。草食男子云々よりも、よほど興味がある」

実代が言つと、既に帰るという選択肢を打ち消していた不破が喫茶店に入っていく。

こんな機会もそうそうないだろう。確かに草食男子とやらより、鈴科王と語るほうがよほど楽しい。

僕たちの話を高木さんにすると、高木さんは実に楽しそうにそれを聞いていた。

しかし、僕と不破からしてみれば、それ以上に聞きたいことがたくさんあるのだ。普段は決してミーハーではない僕たちだが、これだけは別だった。

「先生のペンネーム、どのような由来があるのですか？」

「実はネーミングセンスが無くてね。親友二人の名前をもじらせてもらったんだ。仁科恵一と、鈴ノ宮千晴。鈴と科の字をそれぞれからもらい、千と一を組み合わせて王と読んだ。この二人は小説のモデルにもしているし、何かと世話になっている」

僕と不破はすぐに、とある小説を思い出した。中学生の少女に突然高校生の男子が仕えるというラブコメディで、彼のデビュー作でもある。

「……あの二人、実在したんですか？」

「割とそのまま書いたなあ」

高木さんは冗談っぽく言うが、作中に「高木」という名前の背が高い高校生が登場している。弁舌で眼鏡をかけていたのだが。

その巧みな舌と知謀で大活躍をする場面もあり、主人公達に続いて人気が高い。まさか、その立場に作者がいるとは、夢にも思わなかった。

「じゃあ、あの誘拐事件も本当なのですか？」

「ああ。今から思えば可愛らしい事件だったが、当時は真剣だったな」

開いた口が塞がらないとはこのことである。

しかし、そうなると新たな疑問が湧き出る。彼の表題作「黒衣のサムライ」は、その作中に登場する高木が異世界に召喚されて八面六臂の大活躍をする話なのだ。

「まさか、異世界に行ったとか言いませんか？」

流星にそれは無いと思いながら僕が尋ねると、高木さんは冗談めかして「行ってきたよ」と言った。

洒落にしてはあまり面白くはないのだが、この人が言うところでは本当に行ってきたかのように思えるから不思議だ。

「……さっきから少し気になっていたのだが」

ぼつりと実代が声をあげる。どうやら高木さんは実代が気に入っているらしく、さきほどからしきりに実代に目を向けていたことに僕は気付いている。

「さっき、仁科恵一と言っていたが……同じ名前の人間を私は知っているのだが……まさかとは思うが、高校で教師をしていることないだろうか？」

完璧に目上の高木さんに対しても敬語を使わないのは、高木さんが是非にと言ったからだ。

それにしても、仁科恵一。確かに僕にも聞き覚えのある名前だった。高校時代の社会科の教師の名前だ。

「ああ、仁科なら陽桜高校で教師をしているが、知人だろうか？」

「……縁は奇なりとはよくいったものだ」

実代は高木さんの質問には答えず、どこか間の抜けた顔で溜息をついた。

代わりに不破が、仁科先生の授業を受けていたことを説明した。

仁科先生は確か、陽桜高校が母校と言っていた。だとすると、あの小説の通りならば、仁科先生と高木さんは同級生と言うことになり、僕たちの先輩になる。

高木さんは懐から煙草を取り出して火をつけると「不思議な巡り合わせだ」と呟いた。

「そもそも、千晴ちゃんに出版社の仕事を紹介されてね。最初は記事を書いていたのだが、文芸部門に転向したときに、妙を受け持つことになったんだ。そうしている内に、自分でも書きたいと思うようになったね」

「今でも私の編集者だけどね。高木さんとじゃないと仕事やりにくいし」

嘉納さんは笑いながら呟いた。彼女のペンネームも、高木さんの友人の名前をそのまま流用したという。読み方が少し違うだけで、漢字そのものは一緒だというのだから、彼にネーミングセンスが欠落しているのは本当なのだろう。

そうなつてくると、もう僕たちは歯止めがきかない。

あの鈴科王が僕たちの先輩で、しかも仁科先生の同級生であり、彼の処女作はほとんど事実なのだという。

「最初の作品じゃ、彼女いましたよね。黒衣にも登場してましたけど……あの人も実在するんですか？」

「ああ、多少オーバーに書いたけど、実在するよ」

「じゃあ……別れた後にヨリを戻したのって……え、でも、最後には結婚間近とか」

「先月、入籍したばかりだ」

鈴科流に言えば「衝撃の新事実」である。だが、逆に言えばこれで黒衣のサムライは完全な創作であるということが判明した。

黒衣での高木さんは、そりやもう時流に乗った僕や不破でも敵わないほどに多くの女性を惹きつけていた。結局、全員を元の世界に連れて帰ったのだが、だとすると結婚どころではないだろう。

不破も同じ推論に達したらしい。ほっとしたような、残念のような曖昧な表情を浮かべてコーヒーを啜る。そんな折りだった。

「マサト、ここにいたんだ」

喫茶店の扉が開いて、僕たちよりも幾つか年上の女性が朗らかな笑みを浮かべて近づいてきた。

マサトというのは高木さんの名前だろう。それ自体は別に大したことではないのだが、問題は彼女の容姿だった。

燃えるような赤い髪。それは決して染めた人工の色ではなかった。何より、瞳も赤色で、明らかに外国人のようだったのだ。

「ああ、エリシア。すまないな。少し会話に夢中になっていた」

高木さんは赤髪の女性——エリシアさんに優しい笑みを向けた。

「……おい」

「……うん」

不破が僕の脇を肘で突いた。

有り得ない。彼女の特徴は、黒衣のサムライに登場した薄幸の少女そのものだったのだ。

高木さんは僕たちの様子に気付いたようで、苦笑を浮かべるとエリシアさんを手招きして席に着かせた。

「この世界で言えば、愛人になってしまふな……まあ、幾つか脚色はしているが、本当にそのまま書いたからね。色々あったが、とりあえず全員と一緒に生活しているよ」

高木さんは本気とも冗談ともつかない笑みを浮かべて笑う。エリシアさんは高木さんの隣でにこにこ笑っていた。

「いやー、高木さんってこう見えて、女の子にだらしくってさあ。あっちの世界じゃ全員と結婚してるらしいよ」

「……うわあ」

確かにシーガイアでは一夫多妻制が認められているとか書かれていた。

いやしかし、俄かには信じられない話である。この世とは別の世界があり、そこには剣と魔法が存在している。それはあくまで小説だから受け入れられた事項であって、作者が「存在する」と言い、実際にその異世界人らしきエリシアさんを目前にしても、未だにそれを信じることができない。

「ふむ……鷹成君。信じられないだろう？」

僕の考えを見透かしたかのように高木さんが低い声で笑った。

そのしぐさの細やかなところまでが、そのまま彼の作中の「高木」に見えてくる。

「迎合できない類の話だということは、僕自身が一等よくわかってる。だがまあ、もしもそういう世界があるとすれば、と考えるのは、それはそれで楽しいものだ。話半分に聞いておけばいい」

「……嘘だろうが、本当だろうが関係ない？」

「ああ。少なくともエリシアは目の前にいる。フィア達もこの場にこそいないが、家に帰れば僕を出迎えてくれる。それ以上に望むべくものなど、あるはずが無いだろう？」

嘘でも本当でも、目の前の事実には違いが無い。それはそのまま、僕と実代の関係にもあてはまる。

僕達が本当の恋愛にたどり着いていても、違ってても。目の前に実代がいることに違いは無く、それ以上を望むことなど有り得ない。

「マサト、そろそろ帰らないと。タケルとミコトが寂しがってるってフィアがばやいてたよ」

「ほう、それはいかな。電車旅も楽しいのだが、急いで帰らねば」
高木さんはそれだけ言うと、ゆっくりと立ち上がって僕たちを見る。

「長らく語り合いたいところではあるが、僕も人の親でね。悪いが先に失礼するよ」

「あ、はい。貴重なお時間をありがとうございました」

今から僕らの故郷でもある陽桜市に帰ろうとなると、途中で日付が変わるかもしれないのだが、この人のことだから考えがあるのだろう。僕たちは慌てて立ち上がり、高木さんを見送ろうとする。

しかし、高木さんはそれを手で制して、財布から千円札を抜き出して嘉納さんに渡すと、にこりと笑って懷から小さな水晶片のようなものを取り出した。

「エリシア」

「うんっ」

高木さんが呼びかけると、エリシアさんが意を解したように高木さんの腕を取る。そこでハタと気付く。

あの水晶片は、もしかすると。

「去り際に言う台詞ではないが……千の言葉に万の罫。黒衣のサムライこと高木聖人、いざ参る」

茶目っ気たつぷりの——アニメ化でもするのならば声優は本人し

か有り得ないと思うほど、渋く良く通ったイメージ通りの声で、高木さんは口上を述べて、最後に相変わらずの呪文を唱えた。

「あうとぼーと」

途端、高木さんとエリシアさんの姿が忽然と消える。あまりの出来事に僕と不破。それに実代までが呆然としていて、嘉納さんがやれやれと肩をすくめて呟いた。

「サービス精神旺盛なのはいいけど……人前でやっちゃうかなあ」

どうせ、事情を知らない人には眼の錯覚か何かとしか思われないのだろう。けれども、いいのだろうか。僕達は知ってしまったし、信じてしまったわけだが。

「信じて……ん、待てよ。お、おい鷹成。マナだ、マナ。あれがマナの結晶で、転送魔法を使ったのならば、マナが四散するはずだ。

今からマナを信じて視認できるようにすれば、僕達も魔法使いだ！」

「そ、それだよ！」

不破が慌てて声を上げ、僕も名案とばかりに早速、マナを信じようと試みる。

だが結局、二時間ほど粘っても僕と不破はマナを見ることは出来ず、必死な様子をそれぞれの恋人に晒すだけの結果と相成った。

ところで、この話には余談がある。

高木さんと出会った数日後、実代がアルバイトの時間数分前だといつのに家で寛いでいたときのことである。

「実代、今日のバイト、遅刻しちゃうよ？」

「なに、安心しろ。それでも私とて、黒衣のサムライの熱心な読者でな。妙に生々しい話だと思っていたんだ」

「……へ？」

啞然とする僕に、実代は何故か胸の谷間から水晶片のようなものを取り出し。

「マナというのは、けっこう便利だな。では、行ってくるか……あ

うとぽーとー！」

気がつけば消えていた。

僕が再びマナを信じようと躍起になったのは言うまでも無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6138p/>

黒衣のサムライ外伝

2011年6月20日00時59分発行